

巻頭言

今後の課題

出口孝吉

最近、畜産の分野以外の人から、畜産は曲り角に立っているという話をよく聞く。例えば乳牛の飼養頭数は近年異常な伸びを示して来たが、最近停滞しており、また目下直面している乳価の問題もある。和牛は頭数が漸減の傾向にあるし、昨年来の牛価の低迷は深刻なものがある。豚、鶏は目下価格こそよいが、飼料を海外からの輸入に頼っているだけに問題が多い。農業構造改革についても、基幹作目として従来畜産が主として取り上げられて来たが、本年はむしろ減少している。畜産に関する協業経営は続々と生まれたが、満足な経営をしているものは少ない。その他流通、衛生、飼料、団体問題等一々数え上げればきりが無い状態である。

これら幾多の問題が山積みしているのは、必ずしも畜産だけでなく、農業を取りまく環境の変化に基づくものである。今までの小農的、多角的経営から、専門的、大規模経営へ移り変わる段階において、いろいろの問題を生じるのは当然である。そのうえ畜産では基盤の弱さがこれに加わっている。畜産が成長産業として、選択的拡大の出来ない手ともてはやされたにも拘らず、基盤が確立されていないために、発展が阻害されているのは残念である。「畜産には経営がない」ともいわれる。家畜家禽の生産から消費流通までの一連の問題を根本的な解決をはからなければならない。そのためには、今までの技術を生かして生産増強をはかることは勿論であるが、新しい観念の下に近代化された体制を打ちたてる必要がある。畜産界の人達の意見だけでなく、広く各界か

らの知見を集めて体制を整えることを考えたい。個々の問題については、今回、和牛懇話会やジャージー懇話会が発足し、それぞれの施策樹立に協力願うことになったが、今後この種の会合によって新施策を確立するとともに強力に推進したいものである。